

第5分科会 第1分散会

「地域生活を考える 高齢聴覚障害者の暮らしを地域で支える」

共同研究者 社会福祉法人埼玉聴覚障害者福祉会
理事長 永井 紀世彦
助言者 東京都聴覚障害者連盟 及川 リウ子
司会者 大阪ろうあ会館 中岡 正人
社会福祉法人埼玉聴覚障害者福祉会
酒井 久枝

【はじめに】

今回は、助言者、共同研究者、司会者、レポーターも含めて約50名の参加がありました。この分科会は「地域生活を支える」がテーマとなっており、実際に地域で支援されている方(施設職員、専任通訳者、介護支援専門員等)が多く参加されました。1日目はレポート報告を1本、2日目はレポート報告を1本と、参加者それぞれの活動や業務での悩み等の報告、討議、そして課題の共通理解を図りました。

【レポート報告の概要】

① 「在宅復帰を希望する難病患者の

Aさんの思いにどう寄り添うか」

発表者：特別養護老人ホーム
ななふく苑 地域支援部
高橋行成

法制度の介護保険や障害者福祉サービスなどの制度の狭間におかれている聴覚障害者の相談員として、60代前半の男性(聴覚障害2級)への相談支援による事例報告でした。

ご本人はろう学校を卒業し、一般職に就きながら地域の聴覚障害者協会の役員を担い、休日は旅行に行くなど活発な青年であった。

しかし、脳腫瘍で他界され兄を失った翌年頃からAさんの体に異変が起きる。

激しい頭痛や頸椎の痛みがして「白質脳症の一種(指定難病)」と診断され、退職。その後、自身の持つ病状を明解したく複数の病院を回るが至って納得できていない日々を過ごしていらした。同時にいくつかの機関の相談員と相談を行ったが、A

さんの拒否もあり継続的な支援に至らなかったという。

自宅診療生活となるが、持病のADLが年々に低下していき、入浴も難しく、食事摂取量が減少。心配した周囲より入院を勧めるが頑なな拒否のため在宅治療を続けていながら、小康状態を保つ時期があった。しかし、長くは続かず訪問診療の医師より、早急に点滴が必要であるとのことと、このままでは生命に関わるということで入院生活へ。

その入院生活で、治療再開とするが「胃ろうの造設」手術を要すると依然として拒否反応を示すAさんに視覚的にイメージできるような説明を重ねていただき、

最終的には、Aさん自身の意思で、手術を受けることに受容し選択された。

手術を無事終えた後、Aさんの希望により、在宅復帰に向けてのリハビリを行うが、これ以上の改善は見込めないことにより、現在療養型病棟での生活を余儀なくされている。

【まとめ】

今後として、難病に対応できる24時間体制治療を受けながら在宅復帰を目指していく過程に周囲とのかかわりを遮る行為が見られ、また実母との関係が深く複雑な問題を抱えながらも、どのようにその方らしく地域で暮らしていけるかのところに触れ、支援方法を巡って多職種連携を模索中であることにいろんな制度を活用するためには、Aさんのみにあらず実母にたいしての支援を含めた十分な準備周到がいるところであろうと課題が浮

かびました。

その中でも、私たちは、Aさんのように表出が難しいご本人の真意をくみ取り、それをほかの関係者に伝達し、思いの実現に向けてネットワークを作り一緒に取り組む。関係者と共に権利を守る立場で仕事や運動に携わり、そして実現できるよう尽力したい、と共同研究者および助言者よりお言葉をいただきました。

② 「高齢聴覚障害者支援のための関係機関との連携」

発表者：東京手話通訳等派遣センター
第二地域支援課

(大田区 障がい者総合サポートセンター)

大田区の状況、「東京手話通訳等派遣センター」を含めた大田区立総合サポートセンターの概要、手話通訳派遣コーディネート契約・業務内容をお話しされた後、5件の下記事例に沿って報告。

事例①地域包括支援センター・ケアマネージャー・介護施設と連携

事例②手話通訳者の仕事範囲の整理

事例③きこえる家族との関わり方

事例④老人ホームとの関係づくり

事例⑤医療機関との連携

【意見・まとめ】

上のレポートについていくつかの質問がありました。高い専門性とはなにか。など。

上記事例を基により、聴覚障害によるコミュニケーション障害があるために人や社会との関わりを持ちにくく、ろう高齢者に対し、背景状況を追いながら支援者としてどう支援していくか、どう社会資源に繋げていくのと不足している社会資源拡充の必要性による議論を行い、複雑な制度にうまく絡んでいくなど、今後のろう運動の重要さおよび福祉展望についても語り合いました。

【討論・意見交換／助言者・共同研究者より】

2日間の分科会を終えて…

レポート報告や討議の中より、制度に対する課題

を知り、それを踏まえた運動が必要とのことと、改めて人と制度のつながりを築こうというお話をいただきました。

そして高齢聴覚障害者の暮らしを守るため、社会資源をどう拡充し活用するのか、十分な論議と知恵を積み重ね、安心して笑顔で暮らせる共生社会づくりをともに目指していこうということを確認した分科会となった。

最後に…

聴覚障害の上にコミュニケーションの障害があるがために、人や社会との関わりが持ちにくい聴覚障害者に対し、背景状況を丁寧に追いながら、支援者としてどう受け止め理解し、個別的な関わりをしていくか意見もしくは議論を行ないました。また、報告をもとにそれぞれの現場での経験を共有する場とし、元気になって現場に戻れるような分科会となるよう、発表者・参加者とともに、司会者・共同研究者・助言者一丸となって取り組まれたことと思います。